

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 村上春樹『騎士団長殺し 第1部 第2部』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を800字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『Column Bar 信州 及び ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

(感想文は動画の下の説明欄にPDFへのリンクを張ってあります。)



### 村上春樹『騎士団長殺し』読書会

第18回のツイキャス読書会の課題図書は、村上春樹さん『騎士団長殺し』です。

[前回の『騎士団長殺し』のツイキャス読書会のもようはこちら](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

# 『騎士団長殺し 第1部 顕れるアイデア編』のあらすじ

(以下ネタバレです。)

主人公の『私』は、36歳既婚。美大時代は、抽象画を専門だったが、生計を立てるため肖像画を描くようになった。彼の妻、ユズは、15歳のときに亡くした妹を思い出させたので惹かれた。デートに誘い、クロッキーを描いてあげるとユズは喜んだ。ユズは当時、付き合っていた彼氏とも別れ、親の反対を押し切り、『私』と結婚した。しかし、6年間でふたりの夫婦生活は破綻し始める。妻のユズは、社交的であるが、私は、孤独を好む。そのため妻の補助的役割になりがちだった。彼女が見たある夢をきっかけに、一緒に暮らせないことを告げられ、さらに彼女が浮気していたことも判明する。しかし、彼女は離婚しても「友だちでいてほしい」という。私は、自暴自棄になって、仕事を投げ出し、日本海側を北上し、北海道まで旅に出る。その度の途中で、見知らぬ女と出会い行きずりの関係を持つ。しかし、彼女の後をつけていると思しい中年男(白いスバルフォレストター男)に、睨まれ、その怒りに満ちた顔が、強迫観念となって記憶に残る。旅から戻ると、妻を残して自宅のマンションをでて、美大時代の同級生の所有する小田原の一軒家に引っ越す。そこは、高名な日本画家、雨田具彦のアトリエ兼自宅であったが、彼が、高齢者介護施設に入ったあとは空き家になっていた。私は、モラトリアムの時間を、自分自身のために絵を描くことで過ごそうとするが、描くべきテーマがなかった。そこへ、ちょうど肖像画の依頼があり、免色渉という大金持ちの実業家と面談することになる。彼は、谷間を隔てた大邸宅に住んでいた。彼と親しくなり、交友を深めながら制作にはげむ。屋根裏部屋に物音がするので、観察するとみみずくが棲みついてた。ついでに、『騎士団長殺し』という不思議な絵を発見する。『ドン・ジョバンニ』をモチーフにした日本画だった。雨田具彦のウィーン留学時代の謎が隠された日本画だった。深夜、鈴の音が庭から聞こえてきて、それ以外の物音がすべて消えるという怪奇現象が起こる。音源をたどると庭に祠を見つけた。その話に興味をもった免色は重機を入れて、祠を掘り返す。すると、下に深さ三メートルの石室が発見される。鈴は、その中にあった。免色はその石室に異常な興味を示す。免色にもう一枚、描いてほしいと依頼される。モデルは、彼の子どもかもしれない秋川まりえという少女であった。その少女は私の教えている絵画教室の生徒だった。

(おわり)

## 『騎士団長殺し 第2部 遷ろうメタファー編』 あらすじ

(以下ネタバレです)

免色の娘かもしれない秋川まりえの肖像画を制作しながら、免色との交流をさらに深める私は、雨田具彦が留学先のウィーンで巻き込まれた事件と、彼の弟である継彦が徴兵され、除隊した後に、自殺したという事実を知る。どちらも戦争に関わる事情が背景にあった。ある夜、アトリエに雨田具彦の生き霊があらわれる。そして、秋川まりえが行方不明になる。(彼女は免色の家に、4日間隠れていた)私は、息子の雨田政彦に生き霊のことを話す。また、政彦から、ユズの交際相手の話を打ち明けられる。政彦の同僚が、ユズの浮気相手だということがわかる。彼女は、妊娠7ヶ月であったが、7ヶ月遡ると、旅先の夢の中で、私がユズを無理矢理に犯した日だった。その体験は、免色が秋川まりえの母が、彼の子供を欲して、無理やり性交渉を迫った出来事と、奇妙な対を成していた。論理的には、ユズの妊娠している子は自分の子供ではないが、『私』は自分の子だと信じる決意をする。謎をとくために雨田政彦とともに、高齢者介護施設で、痴呆状態となってベッドに横たわる雨田を訪ねる。政彦が席を外すと、騎士団長が顕れる。彼は雨田具彦がウィーンで体験したナチスの精神的拷問を語り、世界の流れに抗うことのできない個人の無力感・絶望感が、『騎士団長殺し』を描かせたと語る。そして、騎士団長は、彼の人生の終わりにあたって、もう一度『騎士団長殺し』を再演するように、私に命じる。私は、雨田具彦の前で、騎士団長を刺殺し、彼はベッドの上でそれを直視する。そして、絵のとおり、部屋の片隅に現れた「顔なが」を生け捕りしに、顔ながの隠れていた地下のメタファーの世界に秋川まりえを探しに行く。やがて川があらわれ、顔のない男がいた。秋川まりえの携帯ストラップを、彼に渡し、船でメタファーの世界の川を渡った。森を抜け洞窟にたどりつくと、ドンナ・アンナがいた。自分の中にありながら自分の正しい思いを貪り食う「二重メタファー」は、白いスバル・フォレスター男だと悟る。(それは、まあ、これを描いている私の意見だが、要するに、自己欺瞞(いいわけや自己正当化)のことだと思われる。)自己欺瞞をやめるために、ドント・アンナは『手で触れられるものを、すぐに絵に描けるようなもの』を思い出すようにアドバイスする。メタファーに締付けられながら、「光は影であり、影は光なのだ」という認識を得ると、雨田具彦の庭の石室の中にいることに気がついた。彼は、免色によって、石室から救出される。秋川まりえに再会すると、彼女も、忍び込んだ免色の家で、騎士団長にあったことがあるという。彼の母の洋服のしまっているクローゼットであった。そこで、誰か(免色?)に見つかりそうになり、母の衣服に護られたという。『騎士団長殺し』は雨田具彦の鎮魂の絵であったことを、彼女に言い聴かせ、『白いスバル・フォレスター男』の絵とともに屋根裏にしまった。雨田具彦は死に、私はユズが離婚の意志がないのを確認して、再び、ともに生活することになる。やがて生まれた娘に『室』という名前をつける。雨田具彦の家は火事で全焼する。

(おわり)

## 「騎士団長殺し」の感想文

1ヶ月近くかけてようやく読み終えた。本作ではアンシュルス（ナチス・ドイツによるオーストリア併合）やモーツァルトのオペラ「ドン・ジョバンニ」、南京大虐殺から日本の飛鳥時代、上田秋成の「春雨物語」、スバル・フォレスターやトヨタ・プリウスといった現代の大衆化した自動車、果ては東日本大震災など古代から現代までとにかく話題の幅が多岐に渡り、私たちの生活の中の目にするあらゆるものが登場している。村上春樹氏の目指しているというまさに「総合小説」といった感じだ。

上記の他にもあらゆるキーワードが層構造をなして、有機的に繋がるのだろう。個人的に連想したのはヒットラーが無名の画家であったことだ。

例に漏れず名無しの「私」は有名とまでは言えないが、肖像画に関しては知る人ぞ知る才能豊かな画家で、努力や苦悩といったものとは無縁で、受動的あるいは自動的に筋に沿って導かれるままに描き、出来の良い作品を作り上げる。1084の主人公の天吾も数学を教えることや小説を書くことに関して似たような描かれ方であった。文中に出てくる作品が描かれる過程は村上氏自身が小説を描く過程を示しているのだろうと思われた。

以前の作品の中でも出てきた「井戸」が「穴」として登場し、現実と非現実の間をつなぐものとして描かれていたことはこれまでの村上氏の作品の流れを汲むものと言える。

登場人物たちが日常会話では出てこないような奇異な比喻表現を使うのがこれまでの作品でも特徴的であったが、本作では直接的に「メタファー」というキャラクターとして登場しており、「私」が「顔なが」に「もしおまえがメタファーなら、何かひとつ即興で暗喩を言ってみろ」と言ったのに対し、「彼はとても目立つ男だった。通勤の人混みの中でオレンジ色のとんがり帽をかぶった男のように」（第2部 P335）という返しに思わず笑ってしまった。

しばらく時間をおいて自分の中からどんな感想が湧き出てくるかを待ちたい。そんな作品だった。

（おわり）

## 「騎士団長殺し」の感想文

今回 この本を読んで、村上作品が海外で人気があるのが少し分かった気がした。

彼は世界中の読者に対して平等に接していると思った。

例えば、宗教についてはキリスト教の教えに関わることもかいてあるし、仏教の三途の川や閻魔様も出てくるし、神教の祠や靈魂、ミイラ、室という多くの宗教に関することが書かれている。

また、いま世界で起きている様々な問題と苦しみ（孤独 温暖化 不平等 地震 原発 戦争 弾圧など）をさりげなく書いて、改善への希望を代弁して書いている。

そして 話が推理仕立てで面白く書かれているうえ、文章も読み易いし、第2部は、若い人が好むゲーム感覚のストーリー仕立てで書かれている。

また、発展途上国の人々には、文化国家の豊かさと自由を思い浮かばせるような 料理 車 家 音楽 性生活 が書かれ、彼らに夢と希望を与えている。

これらのことが、海外でも愛される理由だと私は思う。

ただ、世の中の裏と表、世界情勢の厳しさとどうにもならない無力感を経験した大人達を読むと現実離れた物足りなさを感じるかもしれないと思った。

（おわり）

## 騎士団長殺し 感想文

村上春樹氏の本は『ノルウェーの森』しか読んでことがなかったが、今回読んだ『騎士団長殺し』は次々と謎が現れ、ページをめくる手が止まらず、発売日から約2日半で読み終えた。

この作品には芸術や歴史についての話が多かったが、どちらにも詳しくない私でもすらすらと興味深く読むことができ、読んでいる自分の頭がよくなったような気になれた。

第1部の後半で、絵の中の騎士団長が出てきて、いきなりファンタジー小説になった。

騎士団長によると彼は「アイデア」だということだが、私はアイデアとは「概念の実体」のようなものだととらえている。人間は人間界に生まれる前にアイデア界で美そのもの（美のアイデア）、善そのもの（善のアイデア）など概念そのものを直接見ているので、この世界で美や善の片鱗に触れたときにわかるのだと大学で教わったし、『国家』をはじめとするプラトンの著作にもそのようなことが書かれている。

騎士団長の飄々としたあり方を見ていると、彼は個別のアイデアではなく、「アイデアという概念そのもの」の形体化のように思える。第2部で騎士団長はアイデアである自分について「姿は自在に変化する」「人の心を映し出す鏡」だと言っている。

私は第1部、第2部を通して、騎士団長を殺すシーンに一番驚き、興奮した。雨田具彦に騎士団長を殺すシーンを見せることでメタファーの通路への入り口が開いたが、これはどういうことだろうか。アイデアがメタファーへの道を塞いでいたということか？

メタファーとは比喩（隠喩）のことである。「二重メタファー」とは「あなたの中にありながら、あなたにとっての正しい思いをつかまえて、次々に貪り食べてしまうもの。そのように肥え太っていくもの」だとのことだが、全然わからなかった。

メタファーがどのように二重になるのだろうか。それは個人の内側で行われることなのだろうか。

また、終盤で震災の話が出てきたときに、すごくありきたりで無粋な感じがして、白けてしまった。

（おわり）

## 『邪悪なる父とは誰か？』

感想文書きたかったのですが、また読んでみました。

再読して気が付いたことは、この物語はとても情報量(伏線)が多いということです。

まず第一部の最初の方で、ユズからあなたの夢を見たと言われるのですが、主人公の私は、話を軽く流していたことを忘れていました。

ユズは、夢を重視して生きていおり、室という娘の名前も夢からつけていますよね。

あとは、秋川まりえの洞察力の鋭さも、再読してからとても印象に残りました。主人公でさえ、まりえとの会話をあとになって復唱していたりする場面が多かったからです。

邪悪なる父=白いスバル・フォレスターの男ですが、二重メタファーの穴から脱出した時の主人公は、苦痛に耐えても前に進むという力を得て、邪悪なる父(暴力)に打ち勝つのは、村上さんの昔から描きたいテーマなのだと思います。

再読して感じたのは、もし第3部が無くても僕の中では騎士団長殺しは、かなり上位の作品になりました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

## 『騎士団長殺し』 感想 ～目に見えないもの～

世の中が、目に見えるもの、手に触れられるものだけで出来ているといつから信じるようになったのだろう。未確認・不確定要素はすべて排除され、論理的・秩序的であろうとする世の中。世の中のほとんどの構成要素が、「心」から派生する目に見えないものだということに……。

この小説は、心から派生する概念を「アイデア」、心の邪悪な暗喩を「メタファー」と表現している。この二つの心の動きが絡まるとどうしても「因果」が顔を出す。

免色は、別れた恋人が生んだ子供に執着してしまい、その子供のまりえの叔母と関係を持ってしまう。その叔母と結婚し、もし子供が生まれてしまうと新たな因果は止められない。このままだとまりえもいずれ、免色の思惑に辿り着いてしまうだろう。この状況に「源氏物語」のあるシーンを思い出した。光源氏が父である桐壺帝の後妻に恋をして、思いを遂げてしまう。結果、後妻の藤壺は、桐壺帝の御子として皇子を生み、皇子を抱いた桐壺帝はこう光源氏に声をかけるのだ。「この御子はおまえによく似ている。兄弟だからだろうか。」と。光源氏は、そこで父帝がすべてを知っていると確信し、この暗いメタファーと共に生涯を送る。後に、光源氏は自らの正妻が別の男の御子を生み、父帝と同じ因果を辿ることになる。これもすべて藤壺に対する執着が引き起こしたことだ。メタファーは人間の性であり、免色はまだ逃れられていない。

「私」もユズに離婚を言い渡され、自分を見失ってしまう。しかし、「騎士団長殺し」の絵に出会い、アイデアのおかげで、自らの「心」の中で迷子にならずにすんだ。最後には、ユズとも向かい合い、人生の舵を切り直す。免色にはできなかった「心」と向かいあうことができたのだ。他人と向き合うのも大変なことだが、自らの心が一番不明瞭なのだ。「私」が迷い込んだ暗闇の道もまりえが迷い込んだ免色のだっ広い家も、すべて各々の心なのだ。どんなに内臓を漁っても、「心」は出てこない。その不確かで目に見えないものこそが人生を支配しているのだ。

それに気づいた「私」の娘の室にも、いずれ「騎士団長」は顕れるかもしれない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。



## 『二重メタファーの深淵』

地下深い森で、ドンナ・アンナが『二重メタファー』を説く。「あなたにとって正しい思いをつかまえて次々に貪り食べてしまう、肥え太っていく。それはあなたの内側にある深い暗闇に昔からずっと住まっているもの」

雨田具彦氏がアウトプットした騎士団長(=アイデア)との出会いが誘因となり、「私」はふだん封印していた内なる感情を意識にのぼらせることになった。その感情とは、雨田具彦氏のウィーンでの経験と共通するテーマだった。すなわちユズからの裏切りや亡き妹への思いという、かけがえのない人を失った喪失感や自分の力ではどうすることもできないものへの恐れだった。

そして「私」は、地下で繰り広げられた二重メタファーとの闘いで、目の前にちらつく白いフォレスターの男や首を締めてくれと懇願する行きずりの女に、結果的に打ち克った。

この闘いぶりは、圧巻だった。この世には、誰からともなく根拠のない罪を背負わせようと押し付けてくる無言の圧力の存在を感じる事がある。私には白いフォレスターの男や首絞め女はこの世の理不尽を表現しているメタファーに思えた。

「私」が打ち克てたのは、進むべき絵の方向性を探求するため自分の内面を見つめ、絵画というアウトプットを続けたからではないかと思う。

ところで、なぜ免色には騎士団長が見えないのか？

免色は、生きて満たされたい気持ちをいつからか捨ててしまった。彼は自分の血が次世代に受け継がれる可能性を持つ秋川まりえへの執着にすがりついている。免色はどうしても一目まりえに会いたかった。そんなとき免色は「私」に接近してきたのだが、彼は次第に「私」に自分のことを話し始めた。

読み手である私には、このアウトプットの行為がアイデアに象徴される「有」と二重メタファーに侵された「無」の分岐点になっているように思えてならない。私は免色にもこの先アイデアが見えてくる兆しを感じる。免色がまりえを諦めきれなかったこと、第三者に感情の吐露をし始めた事によって。

それにしても雨田具彦氏の生きた魂の産物である『騎士団長殺し』が燃えてしまったのは残念だ。私も、一目見たかった。人生が変わったかも知れない。いや、身近なところに『騎士団長殺し』は佇んでいるのかも知れない。気が付かないだけで。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

## 『どろんとした、奥が見えない目』

(引用はじめ)

僕ははじめて河合先生にお目にかかりました。(中略)初対面の印象は「ずいぶん無口で暗い感じの人だな」というものでした。いちばんびっくりしたのは、その目でした。目が据わっているというか、なんとなくどろんとしているんです。奥が見えない。(中略)何かしら重い、含みのある目です。(中略)二度目にお目にかかったとき、すべて一変していました。(中略)その目には、まるで子供の目のようにきれいに澄んだ奥行きがありました。(中略)それで僕にも「ああ、昨日はこの人は意識的に、自分を受動態勢に置いていたんだな」とわかったわけです。おそらく自分を殺してというか、自分を無に近づけて、相手の「ありよう」を少しでも自然に、いわばテキストとしてあるがままに吸い込もうとしていたんだなと。

『職業としての小説家』P300~301

(引用おわり)

肖像画を描くのを生業としている主人公の「私」は、肖像画の依頼人と面談して『クライアントに対して少しなりとも親愛の情を持つ』という作業に努める。まずは、対象を受け入れるという下準備がなくして、クライアントの肖像画に取り掛かるのは、暗闇を手探りで歩くようなものだろう。クライアントをそのまま人格として受け入れられるか、否かが、肖像画の仕上がりに大きく影響するはずだ。対象を受け入れる努力は、大切だ。たとえば、苦手なピーマンを食べなければならないとなれば、みじん切りにして、他の食材に混ぜて炒めるなど工夫するだろう。嫌いなものを、いかにも、美味しそうに食べているように受け入れているように演技するより、美味しいと思える調理法を探して、どうにか、受け入れるほうが、苦痛は少ない。

初対面では、まず私を殺して、相手を一度を受け入れないといけない。

どろんとした、奥が見えない目で、相手を受容するというのは、まずは相手に同化する作業みたいなものなのだろう。

本やテキストを読むというのも、また、まずは受け入れるという下準備が大切だ。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>